千葉中央博自然誌研究報告特別号 (J. Nat. Hist. Mus. Inst., Chiba, Special Issue) (6): 77-82, March 2003

自然誌博物館の役割とフィールドミュージアム展開

中村俊彦

千葉県立中央博物館
〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2

要　旨　自然環境が劣化・退行し自然保護が叫ばれる現状にあって，これに関する様々な要請が自然誌博物館に向けられている．自然や文化に関する情報がどこよりも多く集積され，またその専門家を擁する自然誌博物館にとって自然環境の保持・復元や文化的遺産等の現地保存の対応を担う意義は大きい．そして，その活動はフィールドミュージアム展開によってさらに拡大されることになる．フィールドミュージアムの意義として「自然・文化の保護・保存」「自然・生命の直接体験」「人々の交流による地域資産の掘り起こし」などが挙げられる．このようなフィールドミュージアムは，博物館の利用の視点では，博物館本館の来館者が展示・収蔵資料の原点としてのフィールドへ誘う施設として重要である．また，それと同時に人々，特に子供たちがまず各地のフィールドミュージアムで自然や文化に直接ふれ親しみ，その体験から湧き出た興味や疑問をもとに博物館の収蔵・展示の資料・情報にアプローチする，いわば生活・環境の博物館資料としては0次から，1次（実物・標本），2次（図書・文献），3次（電子情報）の資料へと展開し人々の学びや体験を深めていける，そんな博物館活動のためにもフィールドミュージアムは大いに推進されなければならない．

キーワード：自然誌博物館，フィールドミュージアム，博物館資料，野外博物館，自然保護

自然と人間の調和・共存や地域から全地球規模の環境問題の克服が人間社会の重大な課題になってきた近年，自然や文化に関する資料・情報が集積され，これに関する調査研究活動を行う自然誌(史)博物館は，これまでのモノ資料に基づく活動に加え，自然保護や環境保全に関する新たな対応が求められてきている（沼田，1993a, 1994a, 1996; 千地，1998; 糸魚川，1999; 中村，2000）．

千葉県立中央博物館は，自然誌と歴史に関する知的需要に応え，その生涯学習に貢献するとともに，科学の進歩に寄与することを目的として，1989年，初代沼田眞館長のもとに機関設置された博物館である．房総の豊かな自然と文化を守り育むための資料収集や調査研究を行いつつ，これにかかわる人々を支える活動を展開してきた．当博物館では，資料の収蔵・展示を担う本館のほか，これに隣接する生態園をもち，さらに房総の自然のフィールドで博物館活動を展開するための分館構想を有している（千葉県立中央博物館，1999）．

海のフィールドでの活動については，1999年に「海の博物館」を開館した．現在，山のフィールド活動のための「山の博物館（仮）」の設置に向けて準備中であるが，2003年からは房総丘陵の自然を対象にした「房総の山のフィールドミュージアム推進事業」を開始する．

このような自然・文化の現場へのフィールドミュージアム展開は，自然環境及び文化遺産の保全・再生や人々の自然体験及び環境教育の重要性が叫ばれているなかにあって，自然誌博物館の将来に向けた重要課題である．博物館活動の原点・現状をふまえつつ，自然誌博物館におけるフィールドミュージアム展開についての意義や役割についてまとめた．

博物館の発祥と機能

ミュージアム (museum) の歴史は，古代エジプト紀元前300年の頃，アレキサンドリア宮殿につくられたムゼイオン (Mouseion) に遡ると言われている．これはギリシャ神話に登場する文芸・芸術を司る女神ミューズ (Muse) にちなみ，当時の最新技術や芸術作品，図書等の資料を収集，哲学者をはじめいろいろな学者を招いて研究し，学生を養成した，いわば大学のような施設であったとされる（加藤，2000）．しかし，museumが一般に用いられるようになったのは，17世紀のヨーロッパで，これは主にコレクションやそのカタログの意味で用いられ，次第にその保管場所や展示場を示す言葉としても使用されるようになった（小川，1980）．

日本では，奈良時代の正倉院での資料保管をはじめ社寺においては寄進・奉納物が絵馬堂や宝物殿等で保管され，また公開もされてきた歴史がある．また，江戸時代の「物産会」には，収集品の展示公開も行われていたという．日本人が欧米のミュージアムに接したのは，江戸幕府外国奉行による1860年の遣米使節はじめの各国への派遣団たちであった．このときの報告で

欧米のミュージアムのことを「百物館」「博物所」そして「博物館」と記していた（樋口・椎名，1980）．

明治時代には文部省の中に博物局がおかれ，国際万国博覧会の参加とともに教育および勧業政策から国内各地で博覧会を開催，資料の観覧施設としての博物館も設置された．この博物局および博物館は，その後，内務省，農商務省，宮内省と転々とし，現在の東京国立博物館や国立科学博物館，国立国会図書館，東京大学付属植物園として引き継がれている．

戦後の日本の博物館は，1952年に施行された博物館法に基づく社会教育施設として位置づけられている．これには，博物館とは「歴史，芸術，民俗，産業，自然科学等に関する資料を収集し，保管し，展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し，その教養，調査研究，レクリエーション等に資するために必要な事業を行い，あわせてこれ等の資料に関する調査研究をすることを目的とする機関」と定められている．

このように博物館は，生きた動植物を含め多様な資料を収集・保管しあらゆることに利用する，いささか欲張った，また焦点のない定義である．もちろんこの幅広い目的を包含する定義は，各博物館にとってはその運営を柔軟にし多様な方向性をもてる反面，外部からは目的や機能がわかりにくく，運営環境や館を取り巻く体制に影響されやすい面もある．

これに対し，博物館の国際的組織であるイコム (International Council of Museums) が定める博物館とは，「社会とその発展に貢献するため，研究・教育および楽しみの目的で，人間とその環境に関する物的資料を収集，保存，研究し，これを伝達，展示する人々のために開かれた非営利の恒久的機関である」としている（Edson & Dean, 1994; Ambrose & Paine, 1995（日本博物館協会））．ここで，博物館は「社会とその発展のためにあり (in the service of society and of its development)」，そのための資料とは「人間と環境に関するもの (material evidence of man and his environment)」であり，運営的には「非営利の恒久的機関 (a non-profitmaking permanent institution)」と定義されている．日本の博物館法の定義に比べ，「社会のため」に存立する博物館の使命が明確に示されている．

自然誌博物館の役割

自然誌 (natural history) とは古代ギリシャ以来，自然を克明に記述することを意味する（沼田，1994a）．したがって自然誌の博物館では，宇宙および地球の誕生から，約45億年の地球と生命の歴史のなかで生まれ現在に至った人類を含む多様な生物，そしてこの生物を取り巻く環境等自然の森羅万象についての資料の収集保存，調査研究，展示教育普及がその活動の中心になる．

自然に関する資料には，当然生きた生物とともにその生活の姿や環境，さらに人間の歴史及び自然とのかかわりのなかで生まれるあらゆる文化的事象も含まれる．そしてその資料に基づく人・自然・文化の関係にかかわる調査研究を展開し，その未来のありようを探求していくことは自然誌博物館の大きな使命である．もちろんこのような資料の収集保存と調査研究の成果は，展示その他の教育普及活動を通じて一般市民に還元されなければならないが，博物館で収集保管されている資料を人々が直接教育・研究等に活用する専門的利用も重要な機能である．

沼田 (1994a, b) は，「自然誌博物館の果たすべき役割の第一は自然を詳細にしかも継続的に調査し，その資料を整理保存し，成果を刊行し様々な利用に応えることである」と述べている．そして，そのために「博物館は館の研究者と地域の自然に詳しい自然同好者やアマチュアまたはセミプロの研究者との協同作業が重要」と述べている．

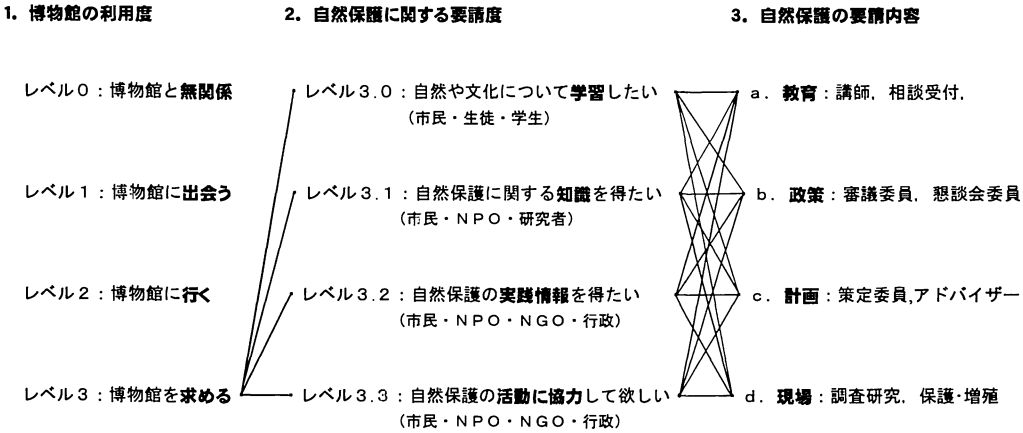

図 1. 自然保護に関する自然誌博物館への要請．

博物館への人々のかかわりは様々なレベルがあるが，近年，特に自然誌分野への人々のかかわりが大きく変化している状況がみられる．その一つとして学校教育・社会教育をはじめ市民・NPO・NGO，企業や行政に至る社会のあらゆるところからの自然保護・環境保全に関する博物館への協力要請の増加が挙げられる．これは講師依頼等の教育的なことから，国・県や市町村の審議委員等の政策に関すること，さらには公共事業のアドバイザー等の計画策定や自然保護調査等の現場対応に関する要請などである（図1）．その中には，市民・NPOの生涯学習や社会参画をはじめ学校教育における「生きる力」を目標にした自然体験や総合的学習への支援，そして国・県の環境アセスをはじめ自然保護や環境保全を重視した新法制定及び法改正から政策・事業レベルでの専門的知識の提供，さらには，これら新しく改訂された法律に基づく市民・NPOとの現場対応も含まれる．いずれにしても，博物館においては市民や行政，また他の研究者等さまざまな人々との交流と協同作業が重要になる．

自然誌博物館の資料

博物館が他の機関と異なる点としてモノ資料の収集保管及び活用がある．博物館においては，実物や標本の資料を「1次資料」，また図書・文献などの資料を「2次資料」として扱う（青木，1999）．植物園や動物園も博物館施設として位置づけられるが，ここでは生きた動植物が1次資料であり，その写真や映像その他の記録等は2次資料となる（図2）．

最近では，これらの資料を電子情報にして発信し，これを受信すればどこでも文字や映像として活用できる状況になってきた．いわゆる博物館におけるIT化

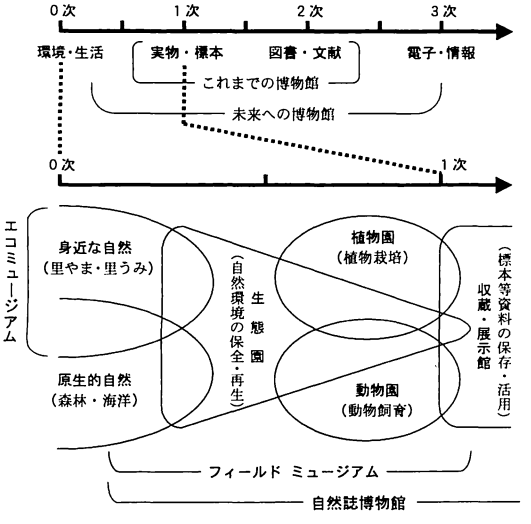

図2. 自然誌博物館におけるフィールドミュージアム展開と博物館資料との関係．

である．こうした電子情報のデータは，いわば博物館における「3次資料」の登場と言える（中村，2002）．電子情報は一瞬のうちに世界を駆けめぐり，多くの人が皆等しく情報を共有することができる．このことは，博物館活動においては，芸術作品や生物のタイプ標本など唯一の資料についても実物を扱うことなく，姿や形等を情報化して各地に発信できる大きなメリットがある．しかしながら，こうして電子化できる情報は外観や計測された形態など，資料そのものが所有する情報の一部にすぎないのである．

人間は文明を発達させ，自然の一部を制御・管理することによって大きな繁栄を獲得してきた．しかし，このような人間と言えども，自然環境といかに調和・共存し，豊かな文化を育んでいくかは，今後の人間社会の大きな課題である．人それぞれの環境から，全地球レベルにおける自然保護や環境保全の対応には，まずその現場での情報収集と現状認識が重要である．そして各現場で健全な生命活動が営まれ，継承されていくには，人間も含めた生物の生活や環境の現場，いわば生きる原点にある「0次資料」への対応が求められるのである（中村，2002）．

以上，博物館資料の高次化と現場回帰との両面性は，博物館が今後社会に貢献していくための必然的方向と言えよう．

自然誌博物館のフィールド展開

生態学的立場から自然保護に大きく携わってきた沼田（1979）は，長年かかわってきた千葉県の文化行政に対して，以下の3つを提案している．その第1は，天然記念物の巨樹名木思想から植生や生態系の保護，すなわち自然を見る目の点から面への転換．第2は，自然誌博物館の設置．そして第3点目として，保護地域や地域博物館と合わせた野外博物館（フィールドミュージアム）の建設である．その後も，沼田は自然誌博物館の重要性とともにフィールド展開の重要性を主張しているが，生涯学習と環境問題とのかかわりにおけるミュージアムとフィールドの役割については次のように語っている．「展示館に対する生態園，死んだ標本に対する生きた外の世界，ハードに対するソフト，室内に対するフィールドをかねそなえ，さらにフィールドも本館に接した部分だけでなく，海の分館，山の分館のように，より現地に近いところへ出かけて自然から学ぼうというのがミュージアムとフィールドの役割ということになる」（沼田，1993b）．

この自然誌の博物館構想にある「生態園」は，博物館本館に隣接し，自然環境を保全・復元した野外博物館（フィールドミュージアム）として位置づけ，また海と山の分館については，植物園やジーンバンク等の施設での保護（*ex situ* conservation）とは異なる現地主義の自然保護（*in situ* conservation）の場とし，さ

らに自然と人間のかかわりを研究し，様々な実践的かつ継続的自然保護を担う機関としての「自然保護基礎研究所」も構想している（沼田；1993 b，1994 b，1999）．

野外博物館の英語訳として，新井 (1956) はかつて field museum を用い，野外博物館における本館・分館・野外の一体性と有機的な活動の重要性を指摘している．その後，新井 (1989) は，野外博物館を現地保存型と収集展示型の２つに分け，field museum は現地保存型で，人文系野外博物館 (site museum) および自然・文化総合野外博物館（生活・環境博物館 (ecomuseum)）と並ぶ自然系野外博物館の英訳としている．この自然誌系野外博物館 (field museum) には，自然遺産を総合的に現地で保護・育成し公開する自然系総合野外博物館，また野生生物の保護・育成を目指す野生生物保護センター，そして貴重な自然遺産を保全し展示公開する天然記念物博物館の３つのタイプを含ませている．

現在，野外博物館の英語訳としは outdoor museum あるいは open-air museum が用いられている（杉本，2000）．欧米で「field museum」は米国のシカゴにある世界的にも有数の規模を誇る自然誌博物館の「The Field Museum」を意味する．したがって，今回，フィールドミュージアムの英訳については，米国人の友人の意見等をふまえ「outdoor living museum」とした．

エコミュージアムとフィールドミュージアムの学術基盤

エコミュージアム (ecomuseum) とは，フランスのジョルジュ・アンリー・リヴィエールによって 1960 年代に提唱された，コア，サテライト，ディスカバリートレイルから構成され，地域住民の伝統的生活を環境とともに保存・育成・発展させるためのフィールド施設である．これは，エコロジー（生態学）やエコシステム（生態系）を重視するとともに，当時のフランスで問題であった地方における過疎化の防止や経済（エコノミー）の活性化対策の一つとして提唱されたもので，その後世界的な広がりを見せ，日本においても 1990 年以降各地で展開されている（新井，1995）．

エコミュージアムの構成要素として，大原 (1999) は，博物館としての活動（収集保存・調査研究・展示教育普及）とともに地域内遺産の保全と住民の主体的参加を掲げ，村おこし等の地域の活性化と経済的効果を期待している．2003 年 1 月時点で，「エコミュージアム」をキーワードとしてインターネット上の Google で検索してみると約 6300 件のヒットがあるが，その内容をみると，やはり地域活性化を目的としたものが多い．

一方，フィールドミュージアムについて沼田 (1999) は「生態園」を充てている．生態園は，地域の自然環境を保全・再現し，これに人々がふれ親しみ，自然及び人とのかかわりを学ぶ野外観察地としての機能を有する施設である．またこれは，セミ現地の博物館 (semi-in-site museum) と位置づけ，海や山などの現地の博物館 (in-site museum) とは区別している．

地域の人が主体となって経済的にも活力ある地域社会を目指す傾向の強いエコミュージアムに対し，日本語としての「フィールドミュージアム」は，地域の自然・文化の保全・再生とその教育・学習及びレクリエーション的活用を中心に据えた博物館活動と言える．

「フィールドミュージアム」をキーワードとして前記と同様のインターネット検索を行うと 16200 件ものヒットがあるが，その中には全県をフィールドミュージアムと位置づけるものもみられた．また，エコミュージアムとの区別がつかないものも多く含まれていた．

高橋 (1982) は，東京湾の自然と文化の総体とその歴史を研究しまた将来を展望する地域学として「東京湾学」を提唱している．そして，この東京湾学に基づく現場展開の一つとして，「富津岬セルボーン化構想」を発表した（高橋，1988）．セルボーン化とは 18 世紀の英国のナチュラリスト，ギルバート・ホワイトがハンプシャー州のセルボーン村で作成した博物誌が 1789 年に「The Natural History and Antiquities of Selborne」として出版され（White（西谷訳），1992），この村の自然環境のすばらしさの啓発・普及とともにその後に保全活動が展開されてきたことにちなんだ言葉である．この構想では，「東京湾の原風景である多彩な年輪を秘めた富津岬と周辺の海の不思議な潮の営みや伝統的な海民の生業を核にした自然と人生の保全」を目標にしている．この東京湾学に裏づけされたセルボーン化構想は陸から海に展開されるフィールドミュージアム構想の一つの原形といえよう．

以上の状況をふまえると，フィールドミュージアムは，自然誌博物館において１次資料から０次資料の方向性，すなわち自然や文化の現場での人を含めた生物・生命の生活・環境の原点へのアプローチとして位置づけることができる．これは従来の収蔵・展示館や植物園・動物園から生態園を経て，数々の文化的事象を含む身近な里やまや里うみの自然や原生的自然へ至る博物館活動の拡大であり，その中核的施設として，人と自然が出会うフィールドとしての生態園が挙げられるのである．さらに，その展開の理論的背景として，自然誌科学としての生物学，生態学，地理学をはじめ歴史学や民俗学，さらに人・自然・文化の一体的関係を探求する景相生態（沼田，1996）はその重要な学術基盤をなすものである．

フィールドミュージアムの意義

地球の自然環境が劣化・退行し自然保護が叫ばれる現状にあって，これに関する様々な要請が自然誌博物館に向けられている．自然や文化に関する情報がどこよりも多く集積され，またその専門家を擁する自然誌博物館にとって自然環境の保持・復元や文化的遺産等の現地保存の対応を担う意義は大きい．そして，その活動はフィールドミュージアム展開によってさらに拡大されることになる．

博物館は社会教育施設としても位置づけられるが，自然と文化に関する膨大な資料・情報が集積された自然誌博物館は，この分野の社会教育を担う施設として極めて重要である．しかし，博物館内に蓄積された標本や図書・文献等の1次及び2次資料の情報は，人間や多様な生物の生活・環境からみると，生きる現場から切り離されたほんの一部にすぎない．

自然，文化ともに変貌著しい現代社会において，人々が自然や文化との一体性を学び体感する接点が次第に失われつつある．博物館資料の3次化の一つのバーチャルリアリティーであるが，今や人々の生活にも深く浸透し始めている．しかし，これに浸りすぎた人間は，たとえ知性が拡大したとしても感性の発達は弱く，社会生活のなかでも本能的行動に支配されてしまうことが増えてしまう（森，2002）．このような状況において，自然や文化のいとなみに直接ふれ親しみ学ぶことのできるフィールドミュージアムは，人間の自然観，生命観を充実させ，動物としての本能と社会の一員としての理性との橋渡しとなる感性を磨いていくことのできる場である．

地域の自然や文化についての情報は，どのような研究者といえども自身の環境として育ち生活してきた地元の人たちにはかなわない．フィールドミュージアムについても地域の自然・文化の資産を守り，これに磨きをかけていくには地元の人々の知識と経験は不可欠である．さらにこれは地元の人とそこを訪れる人との交流の場として機能することも可能である．このような人々との交流によって，地域の知恵や力，また人々の活力を発見・発掘し，これをいっそう高めていく効果も期待できる．

フィールドミュージアムの意義として「自然・文化の保護・保存」「自然・生命の直接体験」「人々の交流による地域資産の掘り起こし」などが挙げられる．このような意義のフィールドミュージアムは，博物館の利用の視点では，博物館本館の来館者が展示・収蔵資料の原点としてのフィールドへ誘う施設としての意義は重要である（藤原ほか，1996）．がしかし，むしろ，まず人々，特に子供たちが各地のフィールドミュージアムで自然や文化に直接ふれ親しみ，その体験から湧き出た興味や疑問をもとに博物館の収蔵・展示の資料・情報にアプローチする，いわば0次から1次，2次，3次と展開しつつ人々の学びや体験を深めていける，そんな博物館活動のためにもフィールドミュージアムは今後大いに推進されていかなければならない．

おわりに

財政的理由から，博物館の統廃合や存在意義が論議される近年であるが，その反面，自然誌博物館に対する社会的要請が日に日に増大している状況にある．もちろん博物館経営の合理化や機能の充実は関係者すべての重要課題であるが，自然や文化を搾取して発展する経済を最優先にする社会ではなく，人々の生きる原点に根ざした社会の将来を考えるとき，自然誌博物館のフィールドミュージアムは，そのありようを指し示す情報源として重要であり，ますます充実させなければならない博物館活動と言えよう．

最後になりましたが，アメリカ合衆国の The New Academy for Nature and Culture の Director, Dr. Willam R. Jordan III 氏には用語の英文表記および英文要旨について貴重な助言をいただきました．ここに厚く御礼申し上げます．

引用文献

Ambrose, T. and C. Paine（日本博物館協会訳）. 1995. Museum Basics 博物館の基本. 292 pp. 尚友会館.
青木　豊. 1999. 博物館資料の分類. 加藤有次・鷹野光行・西田源二郎・山田英徳・米田耕司(編)，博物館資料論. pp. 13–104. 雄山閣出版.
新井重三. 1956. 野外博物館. 日本博物館協会(編)，博物館学入門. pp. 206–216. 理想社.
新井重三. 1989. 野外博物館総論. 博物館学雑誌 14(1–2): 21–46.
新井重三(編著). 1995. 実践エコミュージアム入門. 171 pp. 牧野出版.
千葉県立中央博物館. 1999. 千葉県立中央博物館 10 年のあゆみ. 141 pp. 千葉県立中央博物館.
千地万造. 1998. 自然史博物館：人と自然の共生を目指して. 253 pp. 八坂書房.
Edson, G. and D. Dean. 1994. The Handbook of Museums. 302 pp. Rourtledge, New York.
藤原道郎・鎌田磨人・福田珠己. 1996. フランスのエコミュージアム. 徳島県立博物館研究報告 6: 1–38.
樋口秀雄・椎名仙卓. 1980. 日本の博物館史. 樋口秀雄(編)，博物館学講座 2: 日本と世界の博物館史. pp. 47–107. 雄山閣出版.
糸魚川淳二. 1999. 新しい自然史博物館. 229 pp. 東京大学出版会.
加藤有次. 2000. 現代博物館総論. 加藤有次・鷹野光行・西田源二郎・山田英徳・米田耕司(編)，現代博物館論：現状と課題. pp. 3–22. 雄山閣出版.
森　昭雄. 2002. ゲーム脳の恐怖. 196 pp. NHK 出版.
中村俊彦. 2000. 自然保護と博物館. 加藤有次・鷹野光行・西田源二郎・山田英徳・米田耕司(編)，現代博物館論：現状と課題. pp. 67–76. 雄山閣出版.
中村俊彦. 2002. 里やまミュージアム. ネイチャーサイエンス 9: 64–73.
沼田　眞. 1979. 文化課の 10 周年にあたって. 千葉県の

文化 21: 4.
沼田 眞. 1993a. 環境問題と博物館. 学鐙 90(1): 32-35.
沼田 眞. 1993b. 生涯学習における環境問題とのかかわりにおけるミュージアムとフィールドの役割. 教科研究・中学理科 144: 1-4.
沼田 眞. 1994a. 自然保護という思想. 212 pp. 岩波書店.
沼田 眞. 1994b. 自然誌博物館と生態園. 千葉中央博自然誌研究報告特別号 (1): 1-5.
沼田 眞. 1996. 自然環境保全と自然誌博物館. 白岩正明(編), これからの自然史(誌)博物館. pp. 4-14. オールプランナー, 小田原市.
沼田 眞(編著). 1996. 景相生態学: ランドスケープ・エコロジー入門. 178 pp. 朝倉書店.
沼田 眞. 1999. 自然誌博物館 (本館)—野外博物館 (生態園)—現地の博物館 (海と山の分館)—自然保護基礎研究所. 中央博物館だより 41: 3.
小川光暘. 1980. ヨーロッパの博物館史. 樋口秀雄(編), 博物館学講座 2: 日本と世界の博物館史. pp. 3-19. 雄山閣出版.
大原一興. 1999. エコミュージアムとは何だろう?. エコソフィア 4: 34-39.
杉本尚次. 2000. 世界の野外博物館. 254 pp. 学芸出版社.
高橋在久. 1982. 東京湾水土記. 232 pp. 未来社.
高橋在久. 1988. 東京湾と富津岬: 現代から未来へ. 教室の窓 (中学社会: 新しい社会). pp. 6-7. 東京書籍.
White, G. (西谷退三訳). 1992. セルボーンの博物誌. 525 pp. 八坂書房.

(2003年2月25日受理)

The Role and Importance of Field Programs in Natural History Museums

Toshihiko Nakamura

Natural History Museum and Institute, Chiba
955-2 Aoba-chou, Chuou-ku, Chiba 260-8682, Japan,

Public awareness of the degradation of the natural environment due to industrialization and urbanization has grown rapidly in recent decades and has led to increased appreciation of the importance of nature conservation. It has also led to demands that natural history museums develop programs designed to promote the maintenance and restoration of the natural environment. In response to this growing interest, the Natural History Museum and Institute, Chiba, began creation of the Ecology Park (Seitaien). This project now includes re-created ecosystems, and has proved to be one of our most effective tools for promoting the maintenance and restoration. This outdoor, living museum not only serves as an island of biological diversity in an urban setting, but has proved to be a cultural amenity and a valuable educational resource, especially for children. For many of our visitors, the outdoor living museum offers experiences of the natural environment not available anywhere else in the area. The collection also provides living examples of many plants and animals that visitors might otherwise see only as objects in a museum collection, promoting an awareness of nature as an occasion for wonder and spiritual experience. It also serves as a valuable introduction to our collections and formal exhibitions, since many who encounter interesting plants, animals or processes in the outdoor living museum go on to seek additional information in our exhibitions, library and electronic data system. Our experience strongly supports the idea that field programs have an important role to play in the educational and public outreach programs of natural history museums.